

ピナ・バウシュ、癌の告知を受けた5日後の6月30日に68歳で逝去。直前まで舞台上に立っていたという。フツパター舞踊団からの突然の訃報に、世界が衝撃を受けた。私も深い、でも静謐な哀しみに包まれた。舞踊の求道者らしい、潔い最期だったなど。まさに表現の処女地の開拓者だった。

「世界と書いたのは誇張ではない。ピナ・バウシュは世界の舞踊界の風景を一新させた舞踊家で振付家だった。ヨーロッパでバレエからダンスが自立していくのは20世紀初頭だが、ドイツでその表現主義ダンスの一翼を担っていた

谷川 道子

## 舞踊地図塗り替えた表現の開拓者

クルト・ヨースを師に、1940年生まれのパナは衣鉢をついで、しかしアメリカ留学を経てピナ流に、ダンスの地平をモダンから、コンテンポ

ラリー、ポストモダンへと拓いていき、またその舞台成果で世界を巡演もしていた。フツパター舞踊団の監督をまかされたのは73年で、30

歳そこそこの抜擢。さっそうと師ヨースに倣って「バレエ団」を「ダンス・テアター」と改名し、その探りの新しさに観客の入らない年月が続いた後、やっと注目されるようになる。私が初めて実際の舞台を観たのは、評判になり始めた頃の77年、『青髭バルトックのオペラ「青髭公の城」を聞きながら』だった。禁断の部屋に入った女たちを殺してしまうメルヘンの騎士のオペラが、あのピナ周知のダンスーたちの笑いや叫びやまなざしや動きの繰り返しによる

「世界都市シリーズ」。86年のローマとの『ヴィクトール』で始まって、2004年には埼玉との共同制作として『天地』が生まれた。あるいは自らのカンパニーや作品をレパートリーとし、さまざまな回顧展や、新旧世代による同じ作品の意図的な「競演」、02年には65歳以上の年金生活者26人による『コンタクト・ホフ』再演まで実現させた。



◎エー・アイ、撮影・飯島篤

「男と女の闘い」へ展開していく。度肝を抜かれた。劇場空間がドクン、ドクンと鼓動を打つよう。その彼女によって切り拓かれたダンスと演劇の相互浸透である「ダンス・テアター」。ドイツの劇作家で演出家のハイナー・ミュラーはそれを「もうひとつの自由な演劇」と呼んでいる。「ピナ・バウシュの演劇はメルヘンの時間、：領土は処女地。未知の天災で姿を現す島」。それが80年代にはブームといわれるほどの需要と評判を得て、他の多くのバレエ団や舞

踊団までが自らを、あるいは自作品を「ダンス・テアター」と名乗るようになり、いつしか世界の舞踊地図まで塗り替えていったのだ。ピナの舞台が説得力を持つのは、表現の新しさだけでなく、そのやり方にも前例がななく、何よりそこに嘘がないからだ。「私に興味があるのは、何が人間を動かすのかということ」。ダンスーたちも自己省察で自分の経験や記憶や実感の中から何かを引き出して示し、それがカラー・ジュ・サレ集団的な想起となり、ポリフォニー的な空間が立ち上がった。あるいは世界のさまざまな都市との共同制作の

「カフェ・ミュラー」で自ら踊っていたのを記憶の方も多と思う。最後に会ったたにがわ・みちこ 東京外国語大学教授。専門はドイツ現代演劇。鹿児島出身。著書に「娼婦と聖母を越えて」『プレヒトと女たちの共生』『ハイナー・ミュラー・マシーン』など、訳書にヨッヘン・シュミット『ピナ・バウシュ―怖がらずに踊ってこらん』、『プレヒト作業日誌』（全2巻、共訳）など多数。

## 追悼 ピナ・バウシュ

『カフェ・ミュラー』で自ら踊るピナ・バウシュ

(2006年1月、ドイツ・フツパター)